

ファン・ルーラーの喜びの神学（１）

喜び楽しんでよいのは「神」だけか

日本キリスト改革派松戸小金原教会 牧師 関口 康

はじめに 謝辞

このたびは改革派神学研修所東関東教室主催「信徒講座 生き生きクリスチャンライフ」の中で 20 世紀のオランダ改革派教会の神学者アーノルト・アルベルト・ファン・ルーラー（Arnold Albert van Ruler [1908-1970]）についてお話することが許されましたことを本当に喜んでます。このような貴重な機会を与えてくださったわたしたちの神に、また東関東教室開設のためにご尽力くださった初代室長の安田恵嗣先生に、そしてお集まりの皆様、心から感謝いたします。

しかし、私はこの場所が「信徒講座」であるということ強く自覚しています。難しい話をするつもりはありません。できるだけ易しくお話しいたします。しかしまたそのことは、物事を幼稚に扱うとか、口から出まかせの即興演説を行うとか、集まってくださっている皆様に子ども扱いすることなどを意味してはならないことも分かっているつもりです。

なお今日の話は、この一回限りで終わるものではなく、シリーズものの第一回目です。ですから、今日の短い時間の中でファン・ルーラーのすべてを語り尽くすことは、不可能ですし、するつもりもありません。最初の最初、導入的なお話をするだけで精一杯です。また、私はこれまでいろんなところでファン・ルーラーについてお話ししたり論文を発表したりしてきました。今日から始まるシリーズでは過去のものとなるべく重複しないように話して行きたいと願っております。過去ものは現在すべて入手可能です¹。ご関心のある方はそれらをご参照くださいますようお願いいたします。

¹ ある程度学術的形式を整えて発表したものは以下のとおり。

関口 康「改革派神学・長老主義・喜びの人生 ファン・ルーラーから学ぶこと」
（季刊『教会』第 69 号、日本基督教団改革長老教会協議会、2007 年、22～28 ページ）

関口 康「地上における神のみわざとしての教会 A. A. ファン・ルーラーの教会論の核心」
（『改革派神学』第 34 号、神戸改革派神学校、2007 年、167～181 ページ）

関口 康「ファン・ルーラーにおける人間的なるものの評価」
（季刊『教会』第 73 号、日本基督教団改革長老教会協議会、2007 年、10～18 ページ）

関口 康「説教・教会形成・政治参加、そして神学 A. A. ファン・ルーラーの『教会の実践』の軌跡」
（『改革派神学』第 35 号、神戸改革派神学校、2008 年、117～137 ページ）

易しく語ることは難しい

さて、これから皆さんにお話ししようとしていることは、タイトルどおり「神学」です。ですから難しく話そうとすればどこまでも難しくなっていきます。しかしよく言われますように、「難しいことを難しく話すことは簡単である。しかし難しいことを易しく話すことが難しい」のです。ですから私は今日のための準備をしながら非常に苦しみました。昨日まで、いえ、今朝まで悩み苦しみました。産みの苦しみを味わいました。

松戸小金原教会でもこの信徒講座の案内をしましたところ、「関口先生がお話しになるのでしたらぜひ参加します。ファン・ルーラーのことは何も知りません。でも、わたしたち向けに分かりやすく話して下さるんですよね？」と仰って下さる方々がおられました。その言葉を聞いて、うれしさ半分、苦しみ半分でした。ファン・ルーラーの神学を易しく語る！これほど難しいことはありません！

まだ日本語に翻訳されていない神学者

なぜ「ファン・ルーラーの神学を易しく語ること」が難しいのでしょうか。その理由はたくさんあります。第一の理由は、ファン・ルーラーの書物のほとんどがいまだに日本語に翻訳されていないからです。事実上、日本の教会の中では(わずかな一部分の特殊な人々を除いて)ほとんどの人が、彼の書物をきちんと読んだことがないのです。

「それなら、あなたが翻訳すればいいじゃないですか」とよく言われます。そして実際私はかなり努力してそのことに取り組んできました。ファン・ルーラーの書物を日本語に訳して紹介することを私のライフワークの一つにしようと思い定めて、懸命に取り組んできました。しかし、ここから先はただの言い訳ですが、翻訳の仕事は、傍で見るほど簡単なことではなく、牧師の仕事の片手間のできるようなことでもないのです。山岡洋一さんという私が尊敬する翻訳者の言葉を借りて言えば、翻訳とは「きびしく、むずかしい仕事」であるが、だからこそ「面白く、一生をかけて悔いのない仕事」²なのです。

しかし、私の場合は、「一生をかけて悔いのない仕事」だと信じているのは牧師の仕事であって、翻訳の仕事そのものではありません。ファン・ルーラーの神学を紹介することも、神学そのものも、私の人生の目標ではなく、単なる手段にすぎません。私の人生の目標は「日本のキリスト者を励まし、教会を活性化すること」です。それ以上のことは、考えたこともありません。

今申した点はともかくとして、牧師の仕事と翻訳の仕事を両立させるのは至難の業です。

² 山岡洋一著『翻訳とは何か 職業としての翻訳』日外アソシエーツ、2001年、218ページ。

苦勞自慢をしたいわけではありませんが、私のような端くれであっても、両立することには熾烈を極めるものがありました。その状況は今でも変わりません。

また、「翻訳」だけならともかく、その原稿を出版社に持ち込んで世に問うこと、つまり「出版」までこぎつけるためには、出版社の担当者と知り合いになること自体についての努力や工夫も必要です。そしてもちろんそのようなことよりもっと重要なことは、相当まとまった分量の原稿が必要であるということです。少なくとも、その本を縦に置いてもきちんと垂直に立つくらいの分量が必要です。最低でも 200 もしくは 300 ページ以上の本にすることができるほどの原稿がなければ、(書店に並べる)書物としての体裁すらとれません。三つや四つの論文を翻訳できたとしても、それが本になるところまでが一苦勞なのです。せいぜい神学校や大学の紀要や雑誌に掲載してもらえくらいです。

ですから本当のところを言えば、今の私が喉から手が出るほど欲しいと思っているのは、ファン・ルーラーを含むオランダ改革派の神学者の書物をどんどん日本語に翻訳していく仕事に携わる専門家の存在です。私がそのような者になりたいという意味ではなく(私の仕事は牧師であって、翻訳者ではありませんので) そのような人が起こされることを期待しているという意味です。しかしまたこれこそは「言うは易し、行うは難し」の典型です。翻訳は「横のものを縦にする」だけの誰でもできる仕事ではありません。オランダ語さえできれば、オランダ改革派の書物の翻訳ができるというわけではありません。そもそも、語学力さえあれば「翻訳」ができると考えることは、全くの勘違いです。これも山岡洋一さんが言っていることです³。少なくとも神学の専門的知識なしに神学書を翻訳することは絶対に無理です。ましてキリスト者ではない人や教会生活をしたことがない人が神学書を翻訳することは絶対に不可能です。これは断言できることです。

しかし、それならば、神学校を卒業していて牧師をしていない人が翻訳者になればよいという話になるかもしれません。この点については私が言うと皆さんに対して失礼な言葉として響いてしまうかもしれませんが、またこのことをここで申しますと(ある事情から)差し障りも出てきてしまうのですが、現在の日本キリスト改革派教会の教勢規模では牧師の仕事をしておらず、また神学校の教授でもない、翻訳専門の神学者のような人を養える力はないでしょう。もし仮にこの国の中で神学書を出版すれば飛ぶように売れて印税収入だけで生活できるという事情でもあるならともかく、そのようなことは全く期待できない現状の中では「翻訳専門の神学者」などお話しにもならないでしょう。

しかしアメリカにはそういう人がいます。改革派関係で有名な人なのですが、オランダ改革派の神学書を英語に翻訳することを専門にしているジョン・ヴレンド(John Vriend)

³ たとえば次のように。「翻訳学習者のかなりの部分は『得意な語学力』を活かせる仕事として翻訳にあこがれている。『語学力』は十分にあると考えている。ところが実際には、英文を誤解することなく読む能力がある翻訳学習者はまずいない。翻訳学習者の多くは、自信をもってはいけぬ部分に自信をもっているといえる。これでは上達するはずがない」(同上書、113 ページ)。

という人がいます。この人はとにかく仕事が早く、量をこなしています。500 ページくらいのオランダ語の原著を一年に二冊ずつくらいのペースで訳しています。舌を巻く思いです。

もし日本の教会の中に、そしてなるべくなら日本キリスト改革派教会の中に、オランダ改革派の神学者、なかでもファン・ルーラーの書物を翻訳する専門家がいてくださりさえすれば、「ファン・ルーラーなんて読んだことがない。読んだことがないから知らないし、興味がない」という人が少なくなるでしょう。

そしてそうなれば、私は「ファン・ルーラーの神学を易しく語ること」ができるようになると思います。しかし現状ではそのことは限りなく不可能に近いことであると申し上げざるをえません。

一冊の代表作をもっていない神学者

ファン・ルーラーの神学を易しく語る事が難しいと感じる第二の理由は、この神学者が用いた表現方法そのものに由来するものです。この神学者には、一冊にまとまったこの人の代表作と言えるものはありません。「この一冊を読めばファン・ルーラーが分かる」というような意味での代表作がありません。また最初から最後まで一つの筋道に立って一気に書き下ろされた一冊のまとまった書物がありません。強いて挙げれば 500 ページ以上もある彼の博士論文（より正確に言えば「神学博士号請求論文」）はそれに当たるかもしれませんが、これは「律法の成就」(Vervulling van de Wet) というピンポイントの問題点をとことんまで突き詰めて考え抜いたものであり、ファン・ルーラーの神学全体を網羅的に提示しているものではありません。

ファン・ルーラーが遺したのは、時事折々に発表した小規模の神学論文であり、紀要や雑誌や新聞などに投稿するための原稿であり、教会の礼拝やラジオの礼拝番組の中で読み上げるための説教原稿です。現在わたしたちが入手しうる彼の論文集は、そのようなごく小さな個別の文章を、後で編集してまとめたものです。ですから、批判的な見方をすればやたらと繰り返しが多し、一冊の書物としてのまとまりを感じられません。読み進めることにかなりの忍耐が必要なものです。

しかし、そのような人が現在、20 世紀のオランダ改革派教会における「三大 (grote drie) 神学者の一人と呼ばれています。私がファン・ルーラーの書物を読むたびに思うことは、一冊にまとまった体系的な大部の書物を書くことができる神学者だけが偉大なのではなく、時宜にかなった言葉を神学的に徹底的に考え抜いて語るができる神学者こそが偉大なのだということです。

ですから、(このあたりからそろそろ今日の本題に入っていきたいと思っておりますが) 私は今日の話に「ファン・ルーラーの喜びの神学」というタイトルをつけましたが、この

タイトルの意味は、ファン・ルーラーが『喜びの神学』と題する一冊の本を書いたことがあるということではありませんし、彼の神学全体の特徴を「喜び」というひとつの原理や概念で表現することができるということでもありません。おそらくファン・ルーラー自身は、このようなタイトルを自分の書物につけようとしたことはなかったと思われます⁴。しかし、この神学者は彼自身が書きたいいくつかのごく小規模の雑誌論文に非常に印象的なタイトルをつけています。たとえば「本質的にキリスト教的な生活感情としての喜び」⁵であるとか、「事柄の核心、それは喜びだ！」⁶といったふうに。

そしてそれらの論文を読むかぎり、ファン・ルーラーが用いている「本質的 (wezenlijk)」とか「事柄の核心」(kern van de zaak) という表現は決して大げさな誇張ではないことが分かります。ばらばらとすぐに読み終えてしまえるほど短い文章ではあるのですが、その中にファン・ルーラー神学の全エッセンスが詰まっているのではないかと感じられるほどに極まった表現が見受けられます。ここでは今述べた二つの文章の中身には立ち入らないでおきますが、明言できることは、ファン・ルーラーは「喜び」(vreugde) というものを(神学的に)本質的で核心的な事柄とみなしていた神学者であったということです。

しかしそれは、先ほども申し上げたとおり、ファン・ルーラー自身が「喜びの神学」という言葉を用いたわけではありませんし、そのような表現が彼の書物のタイトルになったことがあるわけでもありません。ですから、わたしたちがファン・ルーラーの神学思想を「喜びの神学」というタイトルのもとにまとめて紹介することには批判的な見方があります。その批判自体は尊重しなければなりません。

重大な決意と覚悟

しかしまた、このことは私だけではなく他の人々(日本におけるこの件の代表者としては牧田吉和先生のお名前を挙げるができます)にも共通していることですが、ファン・ルーラーの神学の基本性格を「喜びの神学」としてとらえようとする立場に立つ人々は、その心に重大な決意と覚悟をもってこのことを主張しています。

「おやおや、大げさなこと。あなたがたが持っているそれは、いったい何の決心であり、何の覚悟なのですか」と問われそうですが、わたしたちの決意と覚悟は決して大げさなものではありません。その内容は、今ここですべてをぶちまけてしまうと、この場がただちに紛糾してしまいそうなほどです。

⁴ ファン・ルーラーの生前に出版された書物につけられたタイトルは『宗教と政治』、『律法の成就』、『宣教の神学』、『キリスト教会と旧約聖書』など。かなりお堅い、人を寄せつけないイメージがある。

⁵ A. A. van Ruler, De vreugde als wezenlijk christelijk levensgevoel, In: Blij Zijn als kinderen. een boek voor volwassenen, J. H. Kok B.V. Kampen 1972, p. 55-58.

⁶ A. A. van Ruler, De kern van de zaak is: vreugde!, In: Blij Zijn als kinderen, p. 131-132.

しかし、ここまで申し上げて黙っているわけには行きません。いくらかセーブしながらではありますが、きちんと申し上げておきます。それをひとことではいえば、日本の教会を含む多くのプロテスタント教会の中に明らかに存する、「喜び」を強調することへの嫌悪感のようなものと徹底的に戦わなければならないという決意と覚悟です。それは、ファン・ルーラー自身が抱いていた思いでもあります。実に彼の神学全体が、その種の嫌悪感との戦いへと向けられていたと表現できるほどです。

その論敵はとらえがたいものです。鶴的と評しうるかもしれないほどに。しかし感覚的にはわたしたちがよく知っているものです。典型的な例を挙げておきます。2001年7月、私はある中会の教師会でファン・ルーラーの神学についての研究発表を行いました。そのときにも私はこの神学者の思想の核心部分に「喜び」という点があることを指摘しました。そうしましたとき私の研究発表を聞いた一人の牧師（比較的若い世代に属する人）から次のように言われました。「私の教会には『喜び』という言葉を聞くだけで鳥肌が立つほど嫌だと言い出す長老たちがいる」。これはある程度予想していた反応ではありましたが、このようにはっきり言われますと、やはり驚きを隠せませんでした。

他にも例を挙げることができます。最近のこと、日本の教会の中ではよく知られているあるキリスト教雑誌を読んでおりましたところ、「喜び」と書いても何ら問題がなさそうな文脈であるにもかかわらずこの字が使われず、「悦び」とか「嘉悦」とか書かれていました。どう見ても明らかに「喜び」という字を用いることが躊躇され、留保され、回避されていました。この字を用いることが、まるで不謹慎なことでもあるかのように！

おそらく皆さんの中にも、次のような言葉をお聞きになったことがある方がおられるのではないのでしょうか。「『喜びの神学』だなんて、まるで福音派のようだ。改革派の神学はそのような人間的な要素や感情的な要素を強調したりはしない」。まさにファン・ルーラーの戦いは、このような見解との戦いでした。そのように表現することができます。

「喜びの神学」における戦いの側面

日本のプロテスタント教会、いえ、わたしたち日本キリスト改革派教会（！）が「喜び」という事柄に対して抱いてきた感覚ないし判断は、牧田先生が次のように書いておられることに集約されるのではないかと思われまます。

「筆者〔牧田先生〕は1992年に日本基督改革派教会東部中会夏期修養会で『信仰の喜び』という主題で講演して以来、自覚的にこの主題に取り組み、考え続け、説教や各地の講演でも積極的に話してきました。なぜ、それほどまでにこのテーマが筆者を魅了してきたのかと言いますと、答えは簡単です。『私にとって“信仰とは喜び”』だからです。これ以上

でも、これ以下でもありません。この心の深い実感と少なくともこれまで学んできたカルヴィニズムとは必ずしもぴたりとは重なるものではありませんでした」⁷（傍点関口）。

もっとも、私自身が日本キリスト改革派教会のメンバーに加えていただいたのは1997年のことであり、それ以前のことは何も知りません。しかし牧田先生が書いておられることは、日本キリスト改革派教会だけに当てはまることであるとは思えません。

私がこの国の教会というものと関わりを持ち始めたのは、実に生まれたときからですので、1965年以来43年間の付き合いです。その中で私自身が感じてきたことも、牧田先生と基本的に同じです。かつての私は、信仰を「喜び」として表現することなど考えることもできなかったほど陰鬱な教会生活を送っていました。「人間的な」とか「感情的な」という形容詞は、私の知る教会とキリスト者たちのあいだでは、常に否定的・批判的・糾弾的な意味で用いられていました。まるでわたしたちが「人間」ではあってはならないかのよう！に！まるでわたしたちキリスト者は「喜びという感情」を抱いてはならないかのよう！

しかし、この呪縛から私が解放されるきっかけとなり、原動力となったのが、ファン・ルーラーの神学との出会いでした。もちろん最初からファン・ルーラーの（オランダ語の）書物を読むことができたわけではなく、牧田先生の手ほどきあってのことでした。

しかし、そのうちだんだん自分自身の目と心で直接ファン・ルーラーの書物を読むようになりました。それによってますますはっきりと分かってきたことは、次のことでした。すなわち、この神学者もまた、私自身が幼心に感じていた教会生活における独特の陰鬱さと同じものを感じてきた人であり、だからこそその陰鬱さからの脱却をはかるために徹底的に戦った人であったということでした。もっとはっきり言うなら、ファン・ルーラーがその神学において「喜び」を強調した動機ないし理由は、彼自身をとりまく教会に対する激烈な批判でした。その批判においては「喜び」を教会とキリスト者の心と生活の中から奪い去ろうとする“ある種の神学”に対する明確な抵抗の意図があったということです。

喜び楽しんでよいのは「神」だけか

ここでファン・ルーラー自身の言葉を引用します。「喜び」を強調してやまなかったこの神学者が具体的にどのような論敵との戦いを意図していたかを知ることができる一文です。

「この点でわたしは、意識的に、古来よりのキリスト教的ヨーロッパの伝統を打ち破りたいと願っている。それはアウグスティヌス以来次のように定式化されてきた。すなわち、

⁷ 牧田吉和著『改革派信仰とは何か 改革派神学入門』日本基督改革派教会西部中会文書委員会、聖恵授産所出版部、1999年、225ページ。

われわれは世界、すなわち被造的現実をただ用いること(uti)だけが許され、ただ神御自身だけを喜ぶこと(frui)が許されている。あたかも神はこの世界とは別の世界であり、別の対象であるかのように！あたかもこの世界なしに神を持つことができるかのように！そうではない。この世界こそが神の世界である。この世界こそが、まさに神の栄光の舞台(theatrum gloriae dei)なのである。この地上の生が、神の栄光の現実化である」⁸。

これだけ読んででもすぐにはお分かりいただけないでしょうから、解説が必要でしょう。この中でファン・ルーラーが明言している「意識的に打ち破りたいと願っている伝統」とは、別の個所では「この区別こそはキリスト教が犯した最大の過ちである」とさえ言いきられているものでもあるのですが、それはアウグスティヌス以来の「古来よりのキリスト教的ヨーロッパの伝統」です。

そしてその伝統の具体的な内容は「享受」(喜び楽しむこと)と「使用」(用いること)との区別であると、ファン・ルーラーは主張しました。その区別とは、わたしたちが喜び楽しんでよいのはただ「神」のみであって、神以外のすべてのもの(被造物)については喜び楽しんでではなく、ただ使用すること(または利用すること)のみにとどめなければならぬというものでした。より端的に言い直せば、キリスト者はこの地上の被造世界における人生を喜び楽しんでならぬという禁欲主義の教えです。

この教えは、西暦4世紀の教父アウグスティヌスが『キリスト教の教え』⁹のなかで言及しているものです。そして、この教えの基本的な部分は16世紀の宗教改革者カルヴァンに受け継がれ、さらに17世紀のウェストミンスター信仰規準にも受け継がれました。ただし、カルヴァンとウェストミンスター信仰規準が強調しているのは、「神を喜び楽しむこと」(fruitio Dei)というポジティブな側面です。神以外のすべてのもの(被造物)については喜び楽しむことは許されておらずただ「使用すること」(uti)のみ許されているというアウグスティヌスの教説のネガティブな側面のほうまでカルヴァンとウェストミンスター信仰規準が明確に継承しているかどうかは、判断が難しいところです。

しかし、カルヴァンとウェストミンスター信仰規準がファン・ルーラーの言うところの「アウグスティヌスの伝統」をかなり色濃く継承しているということは否定すべくもありません。「人のおもな目的は何ですか。人のおもな目的は、神の栄光を表わし、永遠に神を喜ぶことです」(ウェストミンスター小教理問答 第1問答)。この最後の「神を喜ぶこと」

⁸ A. A. van Ruler, De waardering van het aardse leven, Theologisch werk, V, p. 30.

⁹ 「キリスト教の教え」の日本語版(加藤武訳)は、教文館刊『アウグスティヌス著作集』第6巻に収録されている。アウグスティヌスは、たとえば次のように書いている。「われわれはこの死すべき様の生において、『主から離れて巡礼して』(コリ 5・6)いるのであるが、そこでこそ幸せになれる祖国に帰ろうと願うならば、この世を用いるべきであって、この世を享樂してはならない。その結果、『目に見えないものが、造られたものを通してあきらかに知られ、見られる』(ロマ 1・20)ようになり、つまり、物質的・時間的なものを通して、永遠的・霊的なものを把えることができるようになるであろう」(同上書、32ページ)。

(enjoy God) は、明らかにアウグスティヌスの *fruitio Dei* を受け継いでいます。また、カルヴァンは『キリスト教綱要』の「来るべき生への瞑想」(*meditatio futurae vitae*) の教えの中で「地上の生を軽んじるべきこと」を勧めています¹⁰。これがアウグスティヌスの「地上の生を使用すること」(*uti mundo*) の線を受け継いでいると考えることができるでしょう。

「この地上の世界」と「このわたし」をも喜び楽しんでよい!

ところが、ファン・ルーラーはこの「アウグスティヌスの伝統」に猛然と反対しました。その反対によってファン・ルーラーが主張したことの具体的内容ははっきりしています。それは、わたしたちが喜び楽しんでよいのは「神」(*fruitio Dei*) だけではないということであり、「この地上の世界」を喜び楽しんでよいのであるということ(*fruitio mundo*) であり、そして「このわたし」も十分な意味で喜び楽しんでよいのであるということ(*fruitio sui*) でした。

最後の二つの点に対する強調と奨励、すなわち、「この地上の世界を喜び楽しむこと」(*fruitio mundo*) と「このわたしを喜び楽しむこと」(*fruitio sui*) に対する強調と奨励こそがファン・ルーラーの神学を「喜びの神学」として規定するために挙げうる重大かつ決定的な根拠です。

おわりに 「全面的自己肯定」の牧会(学)的意義

今日の話の最後に触れておきたいことは、「このわたしを喜び楽しむこと」(*fruitio sui*) ファン・ルーラーの表現では「全面的自己肯定」ないし「自己受容」(*zelfbeaming*) は、牧会(学)的にきわめて大きな意義があると主張するオランダの実践神学者(J.J. レベル) がいるということです。

ファン・ルーラーの書物を読みながら私がいつも思い起こすのは、「自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」(マタイ 22・39 など) という御言葉です。今日ではもっぱら悪い意味で語られる「自己愛」でさえ、聖書において全面的に肯定されているのです!

(2009年3月14日、改革派神学研修所 東関東教室信徒講座)

¹⁰ カルヴァン著『キリスト教綱要』第3篇第9章。カルヴァンは、たとえば次のように書いている。「神が我々を教えることを必要とされるならば、それに対する我々の義務は、呼びかけに傾聴し、己れの愚鈍を打ち叩き、こうして、この世を軽んじ、来たるべき生への瞑想を心を尽くして努力することである」(改訳版、渡辺信夫訳、新教出版社、2008年、199ページ)。